

どである。本来沿岸魚であるが、汽水域はおろかかなり上流まで遡上しているものもある。眼のある側は両側とされているが、写真で見るとおり浦幌産のものは左側である。浦幌十勝川河口に群生するほかトイトッキ沼にも入り、一部は浦幌十勝川と下頃辺川の合流点にまで遡上している。

▼あとがき

一覧表に明らかなように、確実に浦幌町に分布する淡水魚は少なくとも23種に及ぶ。調査を終えて何かほっとした気持である。しかし、サケ科について言えばニジマスを除いて絶滅に近い状況にある。環境の保全は小手先ではできない。これ以上姿を消してしまう魚類のないよう基本的な対策を強く望みたい。

なお、本稿をまとめるとあたり多くの人々の協力をいただいた。心から感謝したい。

No.	種名	科名
14	コイ	〃
15	ドジョウ(?)	ドジョウ科
16	フクドジョウ	〃
17	ウナギ	ウナギ科
18	イバラトミヨ	トゲウオ科
19	イトヨ	〃
20	ボラ	ボラ科
21	ビリング	ハゼ科
22	ハナカジカ	カジカ科
23	スナガレイ	カレイ科

*スナヤツメは円口綱であるが、一般的な扱いによった。

*?印については本文中の解説を読んでほしい。

*ヤマメは、北海道ではヤマベが通称であるが混同を避けるため正式な呼称にしたがった。

(浦幌中学校教諭)

浦幌町内産淡水魚類一覧表

No.	種名	科名
1	スナヤツメ	ヤツメウナギ科
2	サケ	サケ科
3	サクラマス(ヤマメ)	〃
4	ニジマス	〃
5	アメマス	〃
6	キュウリウオ	キュウリウオ科
7	ワカサギ	〃
8	チカ	〃
9	シシャモ	〃
10	ウグイ	コイ科
11	エゾウグイ(クチボソ?)	〃
12	ヤチウグイ	〃
13	フナ	〃

参考文献

- 宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦(1963)『原色日本淡水魚類図鑑』保育社
 中村守純(1963)『原色淡水魚検索図鑑』北隆館
 小林喜雄(1967)『北海道の淡水魚』北海道大學水産資料館
 山代昭三(1977)「魚類」『釧路湿原』釧路朝日新聞社(1967)『北洋水族館』朝日新聞社
 中村守純(1976)『釣りの魚・川・湖沼編』平凡社
 市川健夫(1977)『日本のサケ その文化誌と漁』日本放送文化協会
 松本尚志(1968)『仙美里の魚類——利別川に住む魚——』本別

生剛村旧市街の街並み形成について

安藤龍逸*・後藤秀彦**

I

「生剛村」とは「浦幌町」の旧称である。生剛村は現在の統太・生剛・養老地区を中心として旧市街を形成していたが、1903(明治36)年12月浦

幌駅の開業に伴い、1905(明治38)年生剛外二戸長役場を現市街に移転し現在の姿になったものである。この間、1906(明治39)年には二級村制の施行に伴い行政区画を改め、十勝村を大津村

に合併し、生剛村・愛牛村の二村を併せて生剛村と呼称するようになり、更に1912（明治45）年4月10日村名を改め浦幌村とした。

1898（明治29）年頃から盛んとなった十勝地域への殖民は、その翌年発布となった「北海道国有未開地処分法」の適用以前の先取り的権利の行使として、特に本州の華族・士族といった大資本の手による大農場の経営として普遍化していくが、ここ浦幌町内にあっても岐阜農場がそうした形の中で出現している。本町内にあっては、1898（明

治29）年を境として岐阜・土田・熊谷の三大農場が相次いで創設され、殊に岐阜・土田の両農場事務所が置かれ、又戸長役場の所在地であった本地域が最初に街並みを形成していったのもあながち不思議ではない。更に、本地域は十勝の表玄関であった大津から最も近い地区であり、駅逓所が設置されていたこともこの事象に拍車をかけたのであるが、この聚落の街並み形成については今まで戸長役場の所在地以外不明の点が多くかった。しかし、筆者の1人安藤は青年時代から歴史の重要

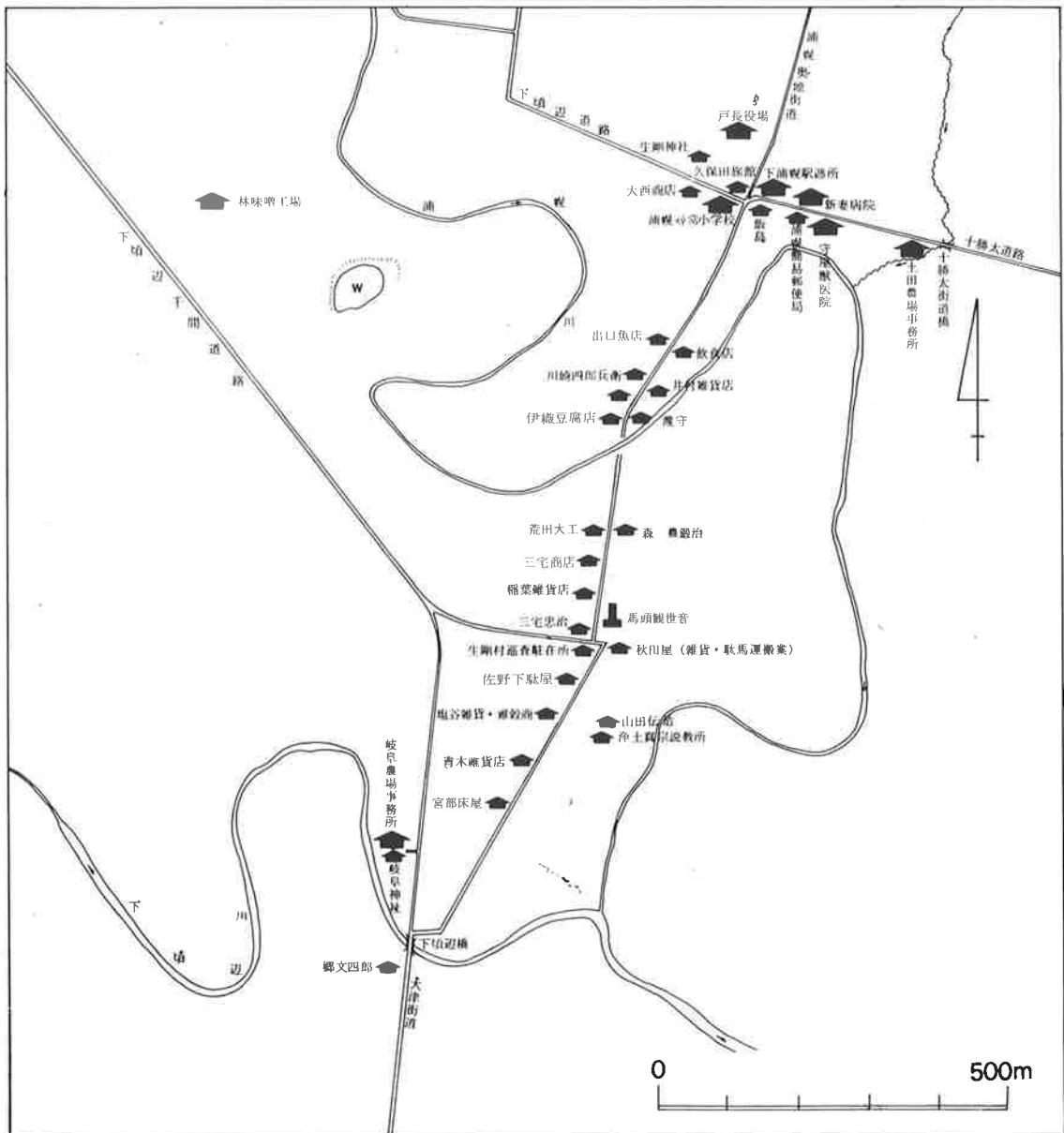


Fig. 1 1902 (明治 35) 年頃の生剛村市街見取図

性を常々念頭に置いていたので、古老諸氏から聞いた事をメモし、又記憶に残っていた事等を振り返っていたが10数年前より特に生剛村旧市街の街並み形成について吉川利昌・中川政雄・川崎四郎・兵衛・出村つる・山本タマ・西みよ・長瀬孝市・出村まつ・金武徳次郎・神山政助・河合耕助の各氏から当時の話をお聞きし、又協力を得て、往時の状況をほぼ復元することができたのでここに図とともにその概要を報告し、大方のご教示を仰ぎたいと思う次第である。

なお、この市街図の一部については既に公表したがあるので付け加えておく（養老中学校、1974）。

II

さて、Fig. 1 に示したのは1902（明治35）年当時の生剛村の市街見取図である。戸長役場・下浦幌駅通所・郵便局・浦幌尋常小学校を中心とする十字路附近と岐阜農場事務所・生剛村巡回駐在所を中心とする浦幌川右岸の地区とに分たれて市街地が形成されているが、主として前者が土田農場の地域、後者が岐阜農場の地域である。

ここでは、これらの建築物・民家のうちその主要なものについて概要を説明していきたい。

十勝郡生剛外二村戸長役場



「十勝郡生剛外二村戸長役場」は、それまで大津村の管轄下にあった生剛村・愛牛村・十勝村の3村を分離独立せしめ、この地に1900（明治33）年4月成立したものである。初代戸長は、大津で書記をしていた小沢熊太が就任し、書記には大津村から渡辺某を招いたという。

生剛神社

鳥居のない小さな祠が祭られていたが、新市街への移転とともに消滅。成立年代及び祭神は不詳。

久保田旅館

久保田要吉（先代）が経営。久保田氏は柵職の心得があったことから、生剛市街の屋根は殆んど氏が葺いたものという。又、夫婦共々料理にも心得があったことから、旅館を開業し新市街に移転後も駅前に○旅館を建て、更に運送業も経営していた（間宮、1947）。

下浦幌駅通所

吉川一馬氏が管理人をしていた官設駅通所である。建物は掘立てであった様であるが詳細は不明である。なおこの駅通所は、国鉄浦幌駅が1903（明治36）年に営業を開始すると同時に新市街の現吉川利昌居宅地点に移転した。

因に、本町内に設けられた官設駅通所は次のとおりである。

- 昆布刈石駅通所 石井 三吉 明治23年
- 下浦幌駅通所 吉川 一馬 明治35年
- 中浦幌駅通所 中川 化松 明治36年4月
- 上浦幌駅通所 朝日 浅吉 明治39年8月
- 上川上駅通所 北村小三郎 昭和4年

新妻病院

新妻直俊氏経営の病院。『北海道殖民状況報文十勝國』には次のように記されている。

「新来ノ移民ハ多クハ間歇熱ヲ患フルモ何レモ輕症ナリ土田農場内ニ開業医一名アリ重症者ハ多ク大津病院ニ趣ク」（河野、1901）。

浦幌尋常小学校

1900（明治33）年7月1日開校。現吉野小学校の前身である。常室簡易教育所に統いて開設した教育施設であるが、何故「生剛尋常小学校」としなかったのか詳かではない。なお、同校は、1905（明治38）年校名を第一浦幌尋常小学校と改め、1911（明治44）年10月11日校舎を現位置に移転している（間宮、1947）。

浦幌郵便局

1899（明治32）年1月16日開業。開業以前は土田農場事務所が郵便を取り扱い、土田常次郎氏が局長となり、吉川一馬氏が局長代理として実務を取り扱っていた。郵便局開設後は、大屋貞吉氏が局長に任命された。本局も、市街地移転とともに現市街に移動した（間宮、1947）。

守屋獣医院

元浦幌村収入役守屋悟氏の祖父の経営である。

土田農場事務所

土田農場は、茨城県人土田謙吉外2名の出願で300余万坪の貸付けを受け、開墾を開始したものである。1896（明治29）年小作人数戸を入植させて諸般の準備をなし、翌1897（明治30）年小作人を募集し、前年分と合わせて95戸とした。更に、1898（明治31）年に15戸を追加した。小作人の出身地は、富山県47戸、石川県43戸、茨城県12戸、その他徳島・山形・香川・新潟などの出身者がいた。農場と小作人との契約は1戸平均4町5反を配当し5カ年間で墾成し、渡航費用及び翌年10月までの食料を貸付けし、小屋掛として必要な品を給与するというものであった。開墾料は1反歩1円～1円50銭で、鍬下年期2年として3年目より小作料を1反歩について50銭を徴収した。小作人中プラオ、ハローを所有している者はなく、鍬のみを用いて開墾にあたっていた（河野、1901）。

渡舟守

浦幌川には幾度か橋が架けられたが洪水の度に橋が流され、専ら渡舟に頼っていた。

馬頭観世音

設立者は不明であるが、4月15日あるいは4月18日に祭典を催していた。

生剛村巡回駐在所

戸長役場の開設とともに設置されたが詳細は不明（間宮、1947）。

岐阜農場事務所



岐阜農場は、岐阜県選出衆議院議員大野亀三郎らの組織する岐阜殖民合資会社の経営で資本金は10万円。1896（明治29）年下浦幌原野に299万余坪の貸付けを受け、同年8月農場管理人下野松太郎が小作人1戸とともに来着しプラオ3台、ハロー2台を購入し人夫を雇い35町歩を開墾し草小屋30棟を作成し移民到着の準備をしたのを初めとす



岐阜農場主 大野亀三郎 岐阜農場管理人 下野松太郎

る。翌1897（明治30）年、小作人59戸、1898（明治31）年16戸を募移した。その出身県の内訳は岐阜県54戸、富山県8戸、石川県6戸、その他となっている。農場と小作人との契約は1戸につき15,000坪を配当し5カ年間で墾成せしめ、1年間の食料・農具・種子・家具等を現品にて貸付けし、又小屋掛料7円を給しこれを3～5年々賦で返納するものであった。開墾料は1反歩につき樹林地2円、草原地はプラオ・馬を使用させて50銭とし、小作料は鍬下3年として4年目1反歩につき50銭、5年目75銭、6年目1円とした。小作人中プラオ、ハローを所有する者は5名、馬1～5頭有するものの13名で、別に農場事務所で9頭飼育していた（河野、1901）。

岐阜農場事務所には、下野松太郎が管理人として居住しており、敷地内に稻荷神社の小さな祠があったという。

III

Fig. 2 に示したのは、生剛村旧市街を中心に養老、朝日地区の人々の居住地区である。これらの多くは岐阜農場及び土田農場の小作人であるが、浦幌川・下頃辺川・十勝川の洪水のため転居した家が6軒あるのが注目される。

（* 農業 ** 浦幌町郷土博物館学芸員）

引用文献

- 河野常吉（1901）『北海道殖民状況報文 十勝国』
- 北海道庁殖民部拓殖課
- 間宮不二雄（1949）『浦幌村五十年沿革史』
- 浦幌町立養老中学校（1974）『閉校記念誌 二十一年の歩み』



Fig. 2 1907 (明治40) 年から1921 (大正10) 年ころまでの居住者

- ①福田タマ②神谷倉吉③熊谷万蔵④神山丈助⑤岩田兼七⑥宮部仁佐衛門⑦浅野万弥⑧神山政助⑨堀万一⑩折戸栄太郎⑪林清治⑫安藤重吉⑬深井信次郎⑭杉山金一⑮塙田長衛門⑯松村和市⑰鳥内広吉⑯岩井留吉⑲鳥本重吉⑳長尾安吉㉑品川武㉒戸長役場㉓下浦幌駅通所（吉川一馬）㉔第一浦幌尋常小学校（現吉野小学校）㉕浦幌郵便局㉖川崎四郎兵衛㉗伊織長太郎㉘渡舟場㉙荒田与作㉚塩谷商店（雑貨・稚穀商）㉛後藤商店㉜中田基三㉝長尾安一㉞玉置捨造㉟交文市㉞中田健治㉞龜山春吉㉞土井牧場㉞龜山保㉞三上某㉛小島幸作㉚大西源七㉞滝川喜太郎㉜岩間藤太郎㉝中川北松㉞鈴木京松㉞中山与三㉞安藤重吉（㉛へ転居前）㉞村岡喜平㉞山田兼吉㉞熊谷万蔵（㉛へ転居前）㉞沖田利平㉞河合吾市㉞鈴木京松（㉞へ転居前）㉞矢野金松
㉞吉田伴三㉞矢野金松（㉞へ転居前）㉞岩井留吉㉞松久義三郎㉞内藤武助㉞矢野弥市㉞岩井弥藏㉞管野某㉞久保田佐吉㉞岩田松雄㉞渡舟場㉞森一作㉞岡崎捨松㉞各務慎司㉞下村増吉㉞西作平㉞鎌田米次郎㉞矢野弥市㉞久保田佐市㉞玉置捨造（㉞へ転居前）㉞春日井某㉞朝日浅吉㉞不明㉞仁羽源祐㉞東本願寺説教所㉞山田某㉞早瀬佐平㉞早瀬善造㉞藤井藤市㉞下野商店㉞龜山春吉（㉞へ転居前）㉞水谷清作㉞渡舟場㉞矢野弥造㉞杉江善十郎㉞山本金平㉞岐阜農場事務所㉞下野松太郎（岐阜農場管理人）㉞土井光次郎㉞郷綱四郎㉞塙原某㉞土井慶市㉞統太分教場（現養老小学校）㉞龜山辰次郎㉞長崎牛太郎㉞村岡喜平㉞金武徳次郎㉞泉某㉞青山浅五郎㉞石田玉平㉞高橋秀夫㉞秋山実㉞神谷栄治㉞渡辺一㉞郷駒吉㉞長瀬孝市㉞矢野金作㉞宮部牛太郎

1978年9月25日	印 刷
1978年9月30日	発 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発 行 責 業 家 村 克 行	
発 行 所 浦幌町郷土博物館 (089-56)	
北 海 道 十 勝 郡 浦幌 町 字 東 山 町 23 番 地	
印 刷 所 大 同 出 版 紙 業 株 式 会 社 (080)	
北 海 道 帯 広 市 西 7 条 南 6 丁 目	